

博士学位論文審査要旨

2007年6月5日

論文題目： 課題遂行時の自己調整過程におけるメタ認知的経験の役割の検討

学位申請者： 赤間 健一

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 岡市 廣成

副査： 同志社大学 名誉教授 山内 弘継

副査： 文学研究科 教授 内山 伊知郎

要 旨：

自己調整学習とは、学習の進行状態や学習方法の適切性を逐次検証し、必要に応じて修正を加えながら進める学習法を言い、動機づけ、行動、メタ認知の3側面からの研究アプローチがある。本論文は、これまで研究の進んでいないメタ認知の側面に焦点を当て、課題遂行時の主観的経験としてのメタ認知的経験が自己調整学習に及ぼす効果の解明を目的としている。メタ認知的経験には、課題遂行に伴い経験される困難感、自信の度合い、努力の必要感、回答の正確さについての判断や評価、課題への集中力といった要素が関係する。本論文の研究1と2では、メタ認知的経験と遂行結果の間には相関関係があり、その関係は課題の遂行が進むにつれて強くなることを明らかにした。

研究3では、メタ認知的経験の要素間には強い関連があることから、メタ認知的経験は何らかの構造を持つ可能性を指摘し、メタ認知的経験の構造を検討した。その結果、(1)課題遂行に対する努力量や集中力と言った遂行過程に関する判断と、(2)遂行結果についての自信度など遂行結果に対する評価に関わる因果構造を明らかにした。この因果構造をもとに、研究4から7では、自己調整過程を予見段階、遂行段階、自己内省段階の3段階に分け、各段階におけるメタ認知的経験の役割を検討した。最初の予見段階は、動機づけに基づいて課題分析を行い、分析結果に基づいて課題遂行の目標を設定する課題遂行のための準備段階であり、メタ認知的経験が、動機づけ信念、特に自己効力感に基づく目標設定の情報源となることを明らかにした。次の実際に遂行が行われる遂行段階は、メタ認知的経験、特に、遂行過程に関する自己観察に基づき自己統制を行うことで、遂行を改善するという自己調整が行われることを明らかにした。最後の自己内省段階は、遂行結果や遂行過程に対する自己判断や自己評価を行う段階であり、この評価や判断についてのメタ認知的経験によって、原因帰属そのものや、原因帰属がその後の自己調整における動機づけに及ぼす影響が異なってくることを明らかにした。

本論文は、因果構造についてはさらに検討の余地が残されているが、メタ認知的経験の構造を明らかにし、予見段階から自己内省段階にいたる自己調整過程におけるメタ認知的経験の役割を明らかにした、価値の高い優れた研究である。よって、本論文は、博士(心理学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2007年6月5日

論文題目： 課題遂行時の自己調整過程におけるメタ認知的経験の役割の検討

学位申請者： 赤間 健一

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 岡市 廣成

副査： 同志社大学 名誉教授 山内 弘継

副査： 文学研究科 教授 内山 伊知郎

要 旨：

上記審査委員3名は、2007年6月5日17時から2時間にわたって学位申請者に面接試問を行った。提出論文に対する質疑に対して、適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的価値が実証された。また、申請者は、本研究の基礎となる人の学習過程に関わる動機づけの心理学ならびに認知心理学の領域について広範な知識を有することが認められた。引き続き語学試験（英語）を行ったが、十分な学力を有することを確認することができた。以上のことから、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 課題遂行時の自己調整過程におけるメタ認知的経験の役割の検討
氏名： 赤間 健一

要 旨：

自己調整過程を考えると、動機づけ、行動、メタ認知という3つの側面から行われるということが知られているものの、メタ認知的な自己調整については、研究があまりおこなわれていなかった。メタ認知は、認知についての知識であるメタ認知的知識と、認知の制御を行うメタ認知的経験の2つの側面を持つ。本研究では、メタ認知のうち、認知の制御に関するメタ認知的経験に注目した。しかし、従来、メタ認知的経験として扱われていたものは、モニタリングとコントロールという二つの側面が中心であった。モニタリングとコントロールに関してこれまでに明らかになっていたことは、課題遂行時に、モニタリングやコントロールを行ったほうが遂行成績がよいということであり、自己調整においてどのような役割をするかということを考える上で、有用な研究はほとんどなかった。そこで、本論文では、メタ認知に注目して自己調整過程を検討するにあたり、これまであまり注目されていなかったメタ認知的経験の側面である課題遂行時の主観的経験としてのメタ認知的経験の側面に注目した。

主観的経験としてのメタ認知的経験は、課題遂行に伴い経験される、困難感、自信感のような感覚、どのくらい努力する必要があるか、どのくらい正確に回答できているかというような判断や評価、また、どの程度集中して取り組む必要があるか、といった思考などをその要素として含むものである。これらのメタ認知的経験は、課題遂行の開始から終了まで存在するものである。これらのメタ認知的経験については、Efklidesらが精力的に研究を行ってきた。Efklidesらの研究結果は自己調整におけるメタ認知的経験の役割を検討する上で有益なものである。しかしながら、メタ認知的経験そのものについて解決すべきいくつかの問題が依然として残されているために、Efklidesたちの研究における疑問点の解明を中心に、課題遂行時のメタ認知的経験の役割を検討した。検討した問題は大きく二つであり、一つは、課題遂行結果とメタ認知的経験の関係であり、もう一つはメタ認知的経験の構造である。

これまでのところ、メタ認知的経験は、課題遂行結果とはあまり関係がないとされてきた。しかしながら、本論文において、メタ認知的経験、特に課題遂行後には、遂行結果と中程度以上の相関関係にあることが示された。また、課題遂行過程に従ってみていくと、課題遂行結果とメタ認知的経験の関係は、課題遂行が進むにつれて強くなっていくということも明らかになった。さらに課題における経験がメタ認知的経験に影響することも明らかになった。メタ認知的経験は、課題遂行が進むにつれ改定され、最初は、あまり遂行結果とは関係のないものであったとしても、だんだん遂行結果を反映した現実的なものになっていくことが示されていた。経験のある課題では、これまでの研究結果を支持する結果が得られた。しかし、未経験な課題では、課題遂行前のものはまったく現実とかけ離れたものであることが明らかになった。ただし未経験課題においても、課題遂行が始まると、経験のある課題における場合と同様に、遂行過程や遂行結果を反映した現実的なものになっていくことが示された。そのため課題遂行時のメタ認知的経験の役割を検討する上では、経験のある課題を用いるほうがよいことが示唆された。もちろん、未経験な課題におけるメタ認知的経験の役割、また経験が増えるにつれてどの

ような変化が生じるかということも検討する必要のある問題である（研究1、研究2）。

メタ認知的経験の要素は、それぞれに非常に強く関連しあっていることが知られてきた。そのために、メタ認知的経験は、何らかの構造を持っている可能性が示唆されている。しかしながら、これまでのところメタ認知的経験の各要素は個別に扱われており、他の概念などとの関係を示したものにおいても、結果が煩雑であり、現実場面における応用を考える場合にも個別に考えなくてはならず、有用なものではなかった。そのため、もし何らかの構造を持っているならば、課題遂行における役割や、自己調整における役割を考える場合にも、個別の要素ごとに考えるよりも理解しやすくなるため構造の問題を検討することとした。結果として、メタ認知的経験の構造は、Efkliides が述べた、困難感が、努力量の判断やどの程度集中する必要があるかといった思考などを含む遂行過程に関する判断と、どの程度正確に課題遂行ができていたか、遂行結果にどの程度自信があるかなどを含む遂行結果に対する評価の2要素に影響するという因果構造を示す可能性が示唆された。しかしながら、依然としてほかの構造によっても説明される可能性が残っており、今後さらに検討する必要がある（研究3）。

いくつかの問題は残ったものの、本論文では、メタ認知的経験は、因果構造を持つものであること、課題遂行に伴い変化していくものの、もとのものが改定されていくこと、課題遂行結果と関係があることが示された。以後、この結果に基づきメタ認知的経験を扱い、自己調整過程におけるメタ認知的経験の役割を検討した。

自己調整過程は、予見段階、遂行段階、自己内省段階という3つの段階に分けて考えることができる。これらの段階はそれぞれ、課題遂行前、遂行中、遂行後に相当する。そこで、本論文では、それぞれの段階に分けて、各段階におけるメタ認知的経験の役割を検討した（研究4から研究7）。

最初の予見段階は、実際の課題遂行を行うための準備段階であり、動機づけに基づき、課題分析を行い、その結果として課題遂行の目標が設定される段階である。この段階のメタ認知的経験の役割は、課題遂行における目標設定、および課題遂行のために必要な情報を獲得する課題分析を反映するものと考えられた。検討するにあたり、メタ認知的経験は、動機づけ信念、特に自己効力感に基づき、目標設定に影響すると予測された。その結果、メタ認知的経験は、予想されたように自己効力感に基づき、目標設定の情報源となることが示された（研究4）。

次の遂行段階は実際の遂行が行われる段階であり、自己観察によって遂行過程の状態を知り、それに基づき自己統制を行い、遂行過程をより適切に変えていく段階である。この段階では、メタ認知的経験は、遂行過程についての情報を獲得する自己観察の機能を果たすと仮定した。つまりメタ認知的経験に反映される情報は、自己統制を行うための情報源となることが予想された。また、遂行段階では、予見段階において設定された目標も自己統制を行う際の基準のひとつであることが仮定された。結果として、メタ認知的経験、特に遂行過程に関する判断が自己統制に影響すること、また目標設定も自己統制に影響することが示された。さらに、メタ認知的経験と自己統制は遂行結果に寄与しており、自己観察に基づき自己統制を行うことで、遂行を改善するという自己調整が行われていたといえる（研究5）。さらに、遂行段階における予見段階の自己調整過程の役割を検討するために、予見段階の自己調整の有無によって、自己観察と自己統制の関係に影響があるかどうか、遂行結果に影響があるかどうかを検討したところ、予見段階の自己調整がない場合には、自己観察は自己統制の情報源とならず、自己統制も遂行結果に寄与していなかった。また、予見段階の自己調整を行った場合、行わなかった場合よりも遂行結果がよいことが示された。したがって、予見段階の自己調整は、遂行段階の自己調整が遂行結果を改善するように機能するために必要であることが示された（研

究6)。

最後の自己内省段階は、遂行結果や遂行過程に対する自己判断や自己評価を行う段階である。またこの段階は、後の課題遂行時の自己調整における動機づけに影響する。この段階では、メタ認知的経験は、課題遂行過程、遂行結果に対する自己評価として機能し、自己判断としての原因帰属に影響すると予想された。また、原因帰属は、成功、失敗という遂行結果を反映し、それぞれの結果によってその意味が異なるものとなることが知られているために、成功、失敗という二つの場合に分けて検討した。その結果、メタ認知的経験は原因帰属に対し、成功、失敗にかかわらず共通した影響と異なる影響の両方を持つことが示された。遂行結果に関わらず見られた影響の中でも、原因帰属にとって重要であるのは、遂行過程に関する判断からの影響であると考えられる。なぜならば、遂行過程をどのように判断するかによって原因帰属、さらには原因帰属からの後の自己調整における動機づけに対する影響が異なる可能性があるということを示すからである(研究7)。

以上、予見段階から自己内省段階にわたって、メタ認知的経験の役割を検討したが、どの段階においても共通していることは、メタ認知的経験は、各段階において、その時の遂行過程の状態についての情報を提供するということである。つまり、どのように自己調整を行うかを判断する際の基準となる情報の提供がメタ認知的経験の役割と考えられる。したがって、メタ認知的経験を知ることによって、どのような情報に基づいて自己調整がなされているのかを知ることができる。自己調整に失敗する場合には、なぜ失敗するのかという理由を考えたり、自己調整がうまくいくように介入を行ったりすることを考える際には、メタ認知的経験を調べることで、誤った情報が用いられている場合には修正するなど、自己調整の失敗の原因を探り、改善していくことも可能になるだろう。